

農業技術情報

平成23年6月2日
ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝農業改良普及センター十勝東部支所
015-572-3128
JA 幕別町 54-2302
JA 札内 56-2131
日甜東部センター 54-2756
幕別町農林課 54-6605

各作物の生育・作業の状況（幕別町 6月1日）（ ）内は平年値

| 作物名 | 生育良否 | 生育状況 | 作業状況 |
|-----------|------|--|-----------------|
| 秋まき小麦 | やや良 | 草丈 58.2 (55.1)cm 止葉期 6/1 (6/1) 茎数 997 (971)本/m ² | |
| 馬鈴しょ | — | 茎長 0.9 (2.1)cm 萌芽35% 茎数 0.9 (1.5)本 | 植付終 5/18 (5/6) |
| てん菜 | やや不良 | 草丈 8.4 (10.5)cm 葉数 9.0 (10.1)枚 | 移植終 5/18 (5/10) |
| 大豆 | — | | は種終 5/27(5/24) |
| 小豆 | — | | は種終 6/1(5/30) |
| 金時 | — | | は種始 5/27(5/27) |
| 牧草 | 並 | 草丈 60.5 (58.9) cm | |
| 飼料用とうもろこし | 並 | 草丈 5.0 (2.8)cm 葉数 2.0 (1.3)枚 | は種終 5/24(5/23) |
| ごぼう | — | | は種終 5/28 (5/25) |
| たまねぎ | 並 | 草丈 18.1 (17.3) cm 葉数 2.2 (2.9)枚 葉鞘径 4.0 (4.7)mm | 植付終 5/23 (5/14) |

畑 作

1 秋まき小麦

生育はほぼ平年並みとなり、止葉期（平年値：6/1）や出穂期（平年値：6/12）も平年並に迎える見込みです。生育状況に応じて適正管理に努めてください。

（1）止葉期以降の追肥（タンパク向上対策）

「きたほなみ」は「ホクシン」よりタンパクが低い傾向があります（平均0.8%程度低い）。

ホクシン作付時にタンパクが低かった場合は、止葉期以降の追肥を検討して下さい。

下の表を参考に追肥量を判断してください。

| 止葉期の上位茎数 | | 開花期以降 |
|------------------------|----------------|-------------------------|
| 窒素追肥量 (kg/10a) | | 窒素追肥量 (kg/10a) |
| 900本/m ² 以上 | 0 | 尿素2%液葉面散布 0~3回（上限3回） |
| 900本/m ² 未満 | 2~4 （上限4kg） | 生育に応じて（止葉直下葉の葉色）判断する |

上位茎数：上位茎（葉耳高10cm以上の茎のこと）

の茎数右の図を参照ください

尿素2%液は、水100ℓに尿素2kgを溶かします

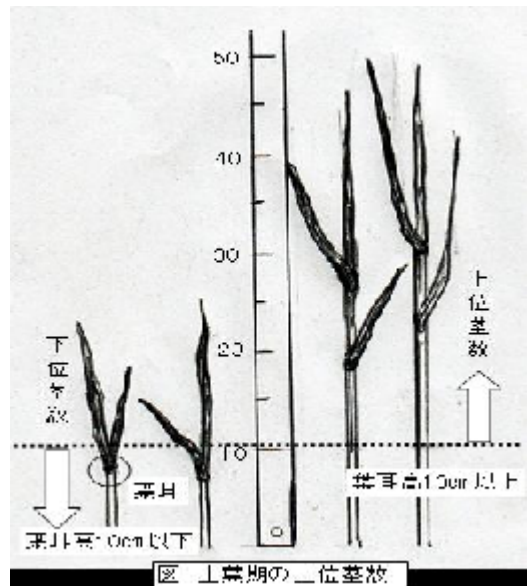


図 止葉期の上位茎数

(2) 倒伏対策

倒伏の恐れがあるほ場では、植物成長調整剤の使用を検討してください。

倒伏軽減剤は遅れると効果が劣りますので、心配なほ場は早めに散布しましょう。

| 薬剤名 | 使用薬量 | 使用時期 | 使用回数 |
|----------------|-----------|-----------|------|
| カルタイム フロアブル | 150ml | 止葉期～出穂5日前 | 1 |
| エスレル 10 | 333～200ml | 止葉期～出穂始期 | 1 |

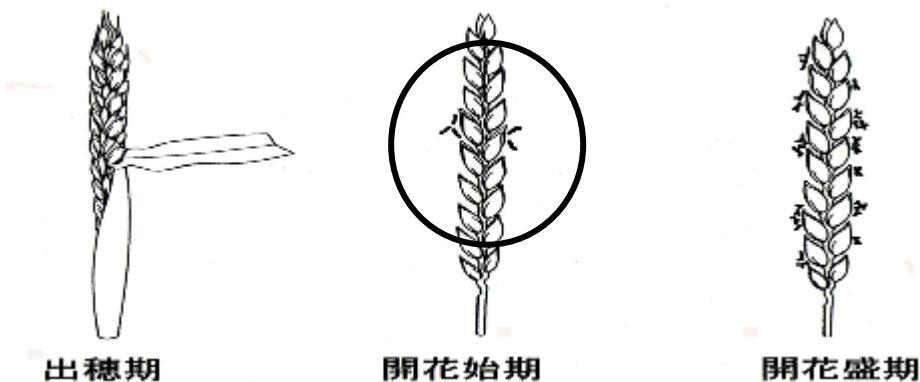
他剤との混用や薬剤散布との当日散布は避ける。「カルタイムフロアブル」は、過度な伸長抑制を避けるため、使用時期・使用量を守り散布ムラや重複散布とならないように注意する。

「防除基準」を参考に適期に使用してください。散布要否の判断がつかない場合は、JAまたは普及センターにご相談ください。

(3) 赤かび病防除

「赤かび病」の発生を抑えるためには予防的防除が重要です。1回目の適期はほとんどの穂が穂首から出た開花始期です(下図参照)。

ほ場をよく観察し、出穂状況に合わせた防除に努めて下さい。



赤かび病は開花時期に最も感染しやすく、湿度の高い環境で多発します。赤かび病防除は、出穂揃い後の初期1～2回目が最も重要です。

1～2回目の防除は、グラミニアラム菌(高温菌)・ニバーレ菌(低温菌)ともに効果のある薬剤を使用しましょう。

| 防除時期 | | 薬剤名 | 濃度(倍率) | 使用時期 |
|------|------------------|--------------|-------------|----------|
| 1回目 | ほとんどの穂が穂首まで抽出した日 | シルバキョフロアブル | 2,000 | 収穫7日前まで |
| 2回目 | 1回目の7日後 | ペフトップジンフロアブル | 800～1,000 | 収穫14日前まで |
| 3回目 | 2回目の7～10日後 | ストピーフロアブル | 2,000～3,000 | 収穫14日前まで |
| 臨機 | 登熟期間 | フィル乳剤 | 1,000～2,000 | 収穫3日前まで |

DMI剤(シルバキョフロアブル、フィル乳剤)は、耐性菌予防のため連続使用は避けましょう。

また、小豆、大正金時、はくさい等に葉害が生じる可能性があるので飛散に注意して下さい。

2 てん菜

(1) 中耕・畦間サブソイラの施工

中耕により地温上昇を図り、生育促進をうながしましょう

排水不良畑では、畦間サブソイラによる排水改善をおこないましょう

(2) 除草剤散布

気象条件を考慮して、雑草発生揃期に処理しましょう

移植・・・移植後 20～25 日頃

直播・・・本葉 2 葉展開期（本葉 5mm 以上）

雑草草丈が 2cm 程度と小さい時に処理すると効果大

薬害発生の恐れがあるので、高温時散布は避けましょう

3 馬鈴しょ

植付作業が平年より遅れ、萌芽期が 1 週間程遅れている状況です。本年は耕盤層が発達して透水性が悪くなっていますので、ほ場が乾燥次第なるべく早めに畦間サブソイラー等を実施し、透水性の改善に努めましょう。

(1) 培土作業

本培土が遅れると収量・品質・規格内歩留まりに大きく影響するため、早め早めの作業に心がけてください。

培土の効果には、地温上昇を防ぎ塊茎の肥大と澱粉蓄積の促進、塊茎の緑化防止や滞水回避による塊茎の腐敗防止等があります。培土の形はカマボコ型が最も適当で培土の高さは 25cm 程度を目標にしましょう。

本培土は着蕾期までには完了しましょう。早めの作業で、茎葉やストロンの損傷を避けましょう（平年の着蕾期：6月18日）。

| | |
|-----|----------------|
| 半培土 | 萌芽後 10～15 日後 |
| 本培土 | 萌芽後 20 日後(着蕾期) |

(2) ナストビハムシ（ジノミ）の防除

成虫による葉の食害だけでなく、幼虫によるイモの表面や内部に至る糸状食入痕の被害により、食用・加工用では商品化率が低下します。成虫や葉の食痕を見たら防除を行いましょう。成虫防除は幼虫密度を低下させます。

| 薬剤名 | 濃度(倍率) | 使用時期 |
|----------|---------|------------|
| ルピトックス乳剤 | 1,000 倍 | 収穫 30 日前まで |

4 豆 類

は種作業は平年よりやや遅れ、出芽も遅れている状況です（出芽期平年値：大豆 6/3、小豆 6/7、金時 6/12）。

(1) 大豆「わい化病」・菜豆「黄化病」(ジャガイモヒゲナガアブラムシ)防除

今年のアブラムシの飛来時期は平年より 1～2 日遅いと予想され、大豆の出芽揃いと重なります。山林や牧草地に近い畑では被害が多くなりますので、防除を計画しましょう。

ジャガイモヒゲナガアブラムシの飛来始予測日(平均気温 1 以上の積算気温 400 の日)

| | 糠内 | 池田 | 豊頃 | 浦幌 | 本別 |
|-------------|------|------|------|------|-------|
| 平成 23 年(予想) | 6月4日 | 6月4日 | 6月4日 | 6月4日 | 5月31日 |
| 平年 | 6月3日 | 6月2日 | 6月3日 | 6月3日 | 5月30日 |
| 遅速 | - 1 | - 2 | - 1 | - 1 | - 1 |

上記表は 5/29 まで の実測値と 5/30 以降の平年値より算出。

出芽後、殺虫剤の茎葉散布

クルーザー F S 3 0 使用時は、出芽揃期の 7 ~ 1 0 日後に行う。

ただし、アブラムシ多発時は、出芽揃期の防除も行います。

クルーザー F S 3 0 を使用していない場合は、2 回防除が基本です。

1 回目は出芽揃期、2 回目はその 7 ~ 1 0 日後に行います。

【出芽後の殺虫剤茎葉散布例】

| 作物 | 病害虫名 | 薬剤名 | 使用濃度 | 使用基準 |
|----|----------------|------------|-------|---------------|
| 大豆 | ジャガイモヒゲナガアブラムシ | ペイオフ ME 液剤 | 2,000 | 収穫 7 日前 3 回以内 |
| | | バイスロイド乳剤 | 2,000 | 収穫 7 日前 3 回以内 |
| 菜豆 | ジャガイモヒゲナガアブラムシ | ペイオフ ME 液剤 | 2,000 | 収穫 7 日前 3 回以内 |
| | アブラムシ類 | ゲットアウト WDG | 3,000 | 収穫 7 日前 3 回以内 |

(2) 除草剤 (雑草処理)

毎年、薬害による黄化・縮葉が見られます。使用基準を守り、適期に散布しましょう。

特に、生育遅延時に薬害が発生しやすいので注意してください。

| 対象作物 | 薬剤名 | 防除時期 | 10a 当薬量 |
|--------------------|---------------------|--------------------------------------|-------------|
| 大豆・小豆 菜豆(金時類のみ) | パワーガイザー液剤 | 大豆・小豆: 出芽直前 ~ 出芽揃 菜豆 : 出芽直前 ~ 出芽期 | 200 ~ 300ml |
| 菜豆 | バサグラン液剤 (ナトリウム塩) | 初生葉展開期 ~ 本葉抽出始期 (雑草 2 ~ 3 葉期) | 50 ~ 70ml |

「パワーガイザー液剤」は有機リン系殺虫剤および他の除草剤との 10 日以内の近接散布は薬害の恐れがあるので避けましょう。

野 菜

1 降雨で固くなったほ場

(1) 5月29日の降雨によって固くなったほ場では、軽く中耕を行って根の発育を促進させて下さい。

2 レタス

(1) 低温により生育に若干の遅れが見られます。下葉にさび病が発生していますが防除の必要はありません。今後、ナモグリバエやべと病の発生に注意が必要です。

(2) 病害虫防除例

| | 薬 剤 名 | 使用倍率 | 水量 | 安全使用基準 | | 対象病害虫 |
|--------|-----------|------------------|---------------|----------------|---|------------------|
| | | | 10a | 使用時期 | 回 | |
| 定植時 | ジュリホフロアブル | 200倍 | 0.5ℓ / ト レ | 育苗期後半 ～定植当日 | 1 | ナモグリバエ |
| 定植20日目 | アファム乳剤 | 1,000～ 2,000倍 | 100 | 3日前 | 3 | ナモグリバエ ヨトウムシ |
| | ダエール1,000 | 1,000倍 | | 14日前 | 3 | べと病・すそ 枯病 |
| 定植30日目 | ダントツ水溶剤 | 2,000倍 | 100 | 3日前 | 5 | アブラムシ類 ナモグリバエ |

3 キャベツ

(1) キスジノミハムシ、コナガ、ナガメの発生が見られますので、初期の発生を抑えるために定植時の防除を徹底して下さい。

(2) 病害虫防除例

| | 薬 剤 名 | 使用倍率 | 水量 | 安全使用基準 | | 対象病害虫 |
|--------|----------------|------------------|---------------|----------------|---|-------------------|
| | | | 10a | 使用時期 | 回 | |
| 定植時 | ジュリホフロアブル | 200倍 | 0.5ℓ / ト レ | 育苗期後半 ～定植当日 | 1 | アブラムシ類 コナガ・アムシ |
| 定植20日目 | カバク DF | 1,000～ 2,000倍 | 100 | 発生初期但 し収穫前日 | 4 | コナガ・アムシ |
| 定植30日目 | スピノール顆粒水 和剤 | 2,500～ 5,000倍 | 100 | 3日前 | 3 | コナガ |

4 はくさい

ほ場が湿潤となりましたが、マルチ栽培のため施肥の流亡はありません。

(1) 移植後8葉期までの抽台防止対策

6月上旬になっても低温条件(13以下)が続く場合は、「マルチとべたがけ資材」を組みあわせた栽培が必要です。

(2) 病害虫防除例

| | 薬剤名 | 使用倍率 | 水量 | 安全使用基準 | | 対象病害虫 |
|--------|----------|--------|--------------|----------------|---|-------------------|
| | | | リットル 10a | 使用時期 | 回 | |
| 定植時 | ジューロフアブル | 200倍 | 0.5ℓ /ト レ | 育苗期後半 ～定植当日 | 1 | アブラムシ類 コガ・アムシ |
| 定植20日目 | マッチ乳剤 | 2,000倍 | 100 | 7日前 | 3 | コガ・アムシ |
| | ロフラル水和剤 | 1,000倍 | | 14日前 | 3 | 菌核病 |
| 定植30日目 | ハクサップ水和剤 | 1,000倍 | 100 | 前日 | 5 | アブラムシ類 コガ・ヨトウガ |

5 だいこん

(1) ベタ掛け被覆資材の必要性和除去の目安

抽台回避による被覆

- ・は種から子葉展開までの期間が13 以下の場合は、どの作型でもベタ掛け資材の被覆による抽台回避が必要です。

被覆資材の除去の目安：本葉3～4葉期頃

- ・は種後30日以降の被覆は、茎葉が繁茂し根部の肥大を妨げる原因にもなります。
- ・除去は葉やけを防ぐために曇天の日に除去して下さい。

(2) キスジノミハムシの防除(ジノミ)

茎葉散布による防除

- ・フォース粒剤使用では、は種後20日頃から茎葉散布を行って下さい。
- ・他の土壤混和薬剤の使用では、は種後14日目頃から茎葉散布を行って下さい。

6 ながいも

本年の植付作業は降雨により、遅れています。

(1) 植付遅れによって芽が10cm以上伸ばした場合

芽が10cm以上になった場合は、出来る限り除去し、再度、数日間催芽を行って植え付けすると、収量低下は最小限に抑えられます。

(2) マルチのスリットからの芽出し

低温・降雨により植付が遅れましたが、マルチ栽培では萌芽時に見回りを行い、マルチのスリット部に引っかかり、出づらい状態にならないように注意して下さい。

7 ごぼう

(1) 追肥と中耕除草の実施

5月上旬は種の作型では、そろそろ追肥時期となります。緩効性肥料を使用していないほ場では、本葉2～3葉期頃に1回目の追肥を行います。

また、除草を兼ねて中耕を行って下さい。

8 にんじん

- (1) べたがけ栽培では、被覆期間をは種後40～50日とし、抽台防止を目的とする場合は本葉6枚まで行います。外気温25℃以上になると高温障害の危険性が高まりますので、曇天の日に除去します。
- (2) 雑草対策
スズメノカタビラ発生ほ場では、セレクト乳剤を処理します。
(スズメノカタビラの3～5葉期まで)

9 たまねぎ

- 移植の遅れと低温により、本葉の黄変が見られます。
施肥の流亡によるものでないため葉面散布資材や追肥を行う必要はありません。新葉が出始めています。
今後気温が高まるとタマネギバエ・ネギアザミウマの発生に注意が必要です。

- (1) タマネギバエの茎葉散布防除

| 使用薬剤 | 使用倍率 | 安全使用基準 | 使用回数 |
|------------|------|----------|------|
| ダイアジノン乳剤40 | 700倍 | 収穫21日前まで | 2回以内 |

ネギアザミウマにも防除効果が期待できます。

- (2) 除草剤の使用

移植後、ゴーゴーサン乳剤が処理できなかったほ場では、中耕雑草を行ってから10a当たりアクチノール乳剤50mlとナブ乳剤150mlで処理して下さい。

10 露地アスパラガス

- (1) ジュウシホシクビナガハムシの発生に注意

気温の上昇によりジュウシホシクビナガハムシの被害(食害により茎葉が曲がる、褐変する)が見られる時期となりました。ほ場をよく観察し、害虫の発生に注意して下さい。

| 使用薬剤 | 使用倍率 | 安全使用基準 | 使用回数 |
|---------|--------------|--------|------|
| アディオン乳剤 | 2,000～3,000倍 | 収穫前日まで | 3回以内 |

農薬を使用するときは、必ずラベルの安全使用基準や注意事項を確認しましょう。

農薬は必ず保管庫にしまい、カギをかけましょう。

使用した農薬容器や袋は、適切に処理しましょう。

農薬散布の際は、マスク、防除衣、ゴム手袋、帽子、防除用メガネ、長靴、肌を覆うタオルを身につけ、しっかり安全対策をとりましょう。

除草剤散布など、スプレーヤを使用する作業が増える時期です。
農薬の安全使用基準を遵守し、周辺作物への飛散防止に努めましょう。

過去6カ年の管内の調査では、農作業事故は「4～6月」、「9～10月」に集中しています。

みんなで声をかけあい、安全作業を心がけましょう！

